

## 楽譜印刷

～美しく見やすい楽譜を

当たり前のように買われている楽譜だが、手書きの原稿から印刷楽譜を製作するには、実は大変な手間がかかるのだ。

作曲家が書き下ろした作品の息吹を直接に感じて演奏に反映させたい時、理論的にはその作曲家自身による手書きの楽譜を使用するのが一番だ。しかしそれぞれに癖のある筆跡で残された内容を正確に読み取るのは楽ではない。

そこで「最終的な清書」という意味あいと、販売のためのメリットとを兼ねてそれらを印刷する。

手書きの楽譜から印刷楽譜を製作の際に一番複雑で時間がかかる工程は、その作品を印刷楽譜用の紙のサイズに合わせて割りつける計算である。たとえば400小節ある作品だから1ページに5段、1段8小節として、つまることは10ページで完成！という単純計算だけではすまないのである。

まず各小節に書き込まれている音符の数が違う。たとえば第34小

節は16分音符が多いので5センチのスペースが必要だが、その前後の小節は全音符ひとつずつだから1センチでOK、などと単純処理して印刷されたら、非常に見にくい楽譜になってしまう。

オーケストラスコアの割りつけも一筋縄ではない。場所によって使用される楽器の数が異なるからだ。

楽章とページの終りとが一緒になるに越したことはない。ピアノの楽譜やオーケストラのパート譜などでは、右のページが終わったところて人の助けを借りずに譜をめくることが可能か、という点も、割りつけの際に考慮される。

その上視覚的にも「美しい」楽譜に仕上げるためには、ひとつひとつの小節の中に存在する音符の数、音価、臨時記号の有無とその数まで含めて、すべてがバランス良く配置されなくてはならない。

歌曲のようにテキストが入る場合には、歌詞が対応する音符の下に入り切るかどうか計算する必要がある。

和音の構成音が縦一列に並びきらない場合には、どの音が右側、あるいは左側に配置されるか、などなど印刷楽譜で使用されるルールを挙げただしたら切りがない。それらはすべて「見やすく、美しい」楽譜

を製作する、という観点から、長年の経験をもとに決められてきた事なのである。

これらのルールを遵守した上で各小節ごとに計算が行われ、いよいよ印刷原盤が製作される。

昔ながらの一般的な方法は、エッチングのように、比較的軟らかい金属盤に五線譜や音符を左右対称に打ち込んでいく、というもの。

しかしこの方法では本来の楽譜を原盤上では左右対称に作らなければならぬ。当然ミスも出やすいし、また一旦ミスしてしまうと、その校正が大変だ。

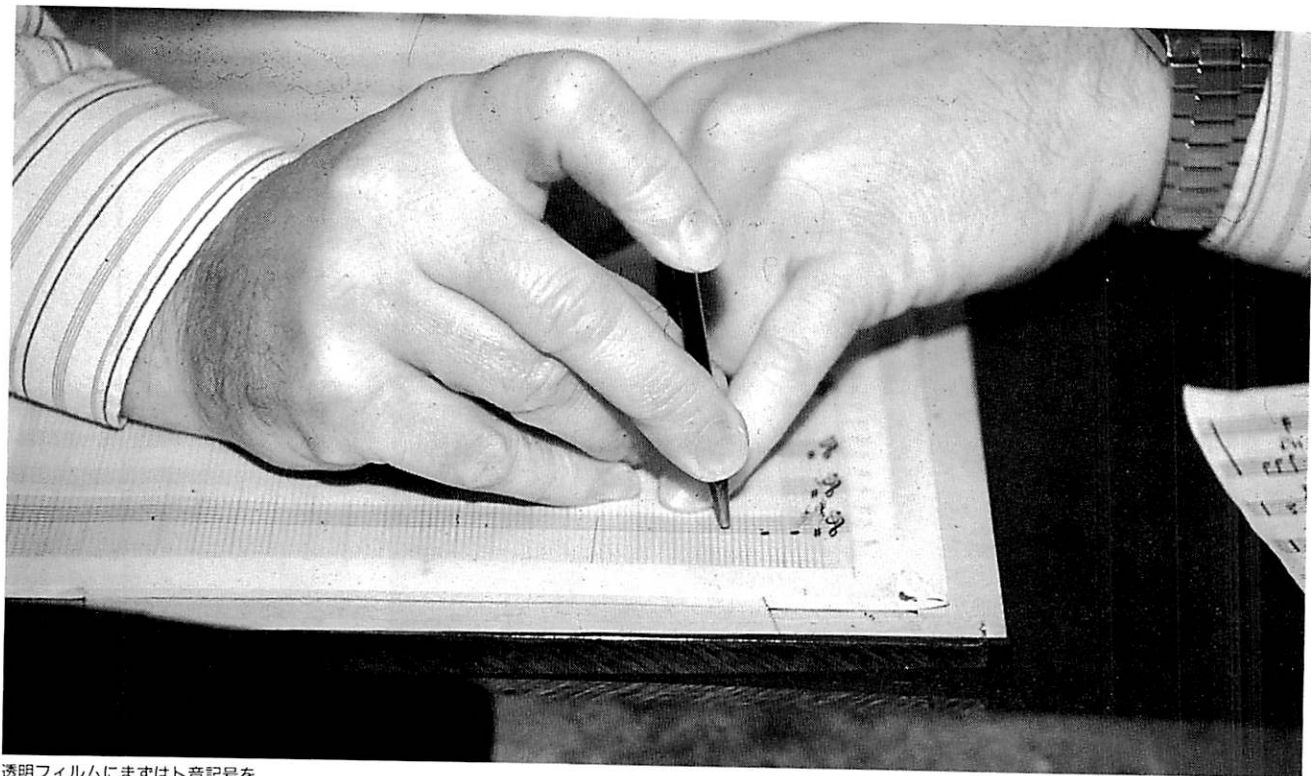
ウィーソンのドプリンガー社は、この印刷楽譜の製作工程における画期的なパテントを所有している。

ドプリンガー社のアイデアは、透明なフィルムの上に五線譜をひき、そこに音符や記号を、シフト押していく、というもの。

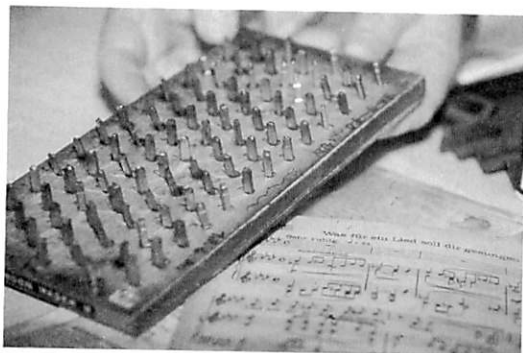
あつけないほど簡単なアイデアだが、この方式は印刷楽譜製作の歴史上、偉大な一歩だ。

この際にフィルムの材質に合わせて調合されるインクが「光を通さず、すぐ乾き、ミスした場合には簡単に消せる」という特別なもので、これこそが最大の企業秘密である。

五線譜はフィルムの裏に書き、それ以外の音符などは表に押ししてい



透明フィルムにまずはト音記号を



音符などのハンコの数々

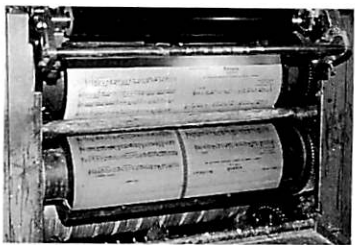


定規を使って小節線を書き入れる



原盤製作のエキスパート、シュティッヒャ氏と

印刷工程のチーフ、フロイヤー氏。この機械で転写を行う



フィルムからアルミに転写された原盤を印刷機に装着する

くので、たとえミスが消しても五線譜まで一緒に消えるようなことはなく、透明フィルムだから下に方眼紙を敷き、縦の線を揃えたり、横のバランスの割振りを簡単にチェックできる。左右逆に原盤を作る必要もない。

完成した原盤フィルムは、その後薬剤を塗ったアルミニウムの薄板に紫外線によって転写される。それをそのままオフセット印刷機に装着し、楽譜が量産されるのだ。

比較的簡単な楽譜でも、1ページ分の原盤フィルムを完成させるのに6時間以上かかるという。

楽譜の割りつけがある程度までこなせるコンピュータソフトも開発されつつあるが、大規模な作品の楽譜を製作するにはインプットしなければならぬデータが多すぎて、その暇に本職の人が自分の頭で考え、手で作ったほうがよっぽど速いのだそうだ。

その職人さんが一番困ってしまったのは、作曲家による追加訂正である。音が違うのを直すくらいは朝飯前でも、小節数が増えたり減ったりするのは泣く思い。一番手間と時間がかかる割りつけ計算を全部やり直さなくてはならないからだ。